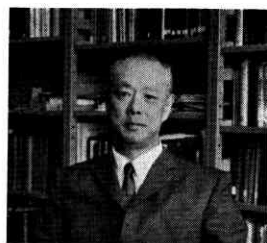


UDC 92 (Kubota)

久保田 廣先生を悼む

小瀬輝次・富永五郎



故久保田教授

第1部久保田廣教授は本年7月10日午前10時15分、東大付属病院で逝去されました。一昨年11月に心筋硬塞にかかられたのですが、一時は研究所に平常どおり出勤されるまでに回復されたのでした。しかし見かけのお元気さとはうらはらに病気は徐々に進行していたのであります。今年2月東大病院に定期的検査にこられたとき、そのまま入院を命ぜられ、5月まで病院におられました。その間もお見かけしたところ至ってお元気のように、ベッドの上から、得意のジョークをとばしておられました。6月中旬に第1部の教官一同で鎌倉にお見舞申し上げたときも、お元気で歓談しておられたのでありますが、それからわずかひと月たらずで不帰の客になられるなど、われわれには全く信じられぬことであります。

先生はつね日ごろ大学教授のなすべき仕事は「よい研究、よい教育、よい著作」の三つであると主張され、いま自分に残された仕事は著作であるということで、この2年間の御療養中には「光学」第2巻の執筆に心血をそそがれました。6月末にようやく脱稿されましたが、それでも7月初め御入院のときにはその原稿を病院に持って行くといっけなかつたそうで、最後まで推敲の手を休ませられませんでした。

先生は昭和9年東大理学部物理学科を卒業後、理化学研究所・石田研究室に入られ、スタルク効果など分光学の研究を始められました。昭和10年には現役兵として応召され、昭和14年よりは陸軍兵技少尉として東京造兵廠に召集勤務されました。昭和17年召集解除とともに第2工学部に助教授となられ応用物理学第2講座を担当され、同23年教授に昇任、同25年より生産技術研究所勤務となりました。

先生の御研究はレンズの結像性能の研究と、光の干渉回折の理論的研究が幹となり、これから眼鏡レンズの収差の研究、レスポンス関数の研究、また干渉色、鋭敏色の研究、干渉薄膜の研究、位相差顕微鏡、偏光顕微鏡の研究等多方面にわたる輝かしい成果が枝となって栄えたといえます。この幹をなす研究は、本来光学は純粋物理学としてではなく応用物理学の一部門を形成すべきであり、それには古典をよく噛みしめて、その中から新しい分野を開発するという信念に貫かれて行なわれたもので、この幹の太さがそのまま先生の大きな研究業績をつくらせたものであります。昭和34年、光学の映像に関す

る研究に対して日本学士院賞が贈られ、また昭和42年には干渉膜の研究に対して紫授褒章が贈られました。

先生はこのようにわが国の光学研究を国際水準をめきんのように高められるとともに、直接的な国際的活躍もまた活発でありました。国際光学会議の副会長として、さらには *Optica Acta*, *Progress in Optics* の編集委員として国際交流や日本の光学研究の国際的舞台への紹介に尽力されました。昭和39年秋、日本で開かれた国際光学会議では実行委員長として、超人的な努力を重ねられ、この会議を大成功に導びかれたことはいまだわれわれの記憶にあざやかであります。しかしいまにして思えば、このときのお疲れが先生のご病気の最大の原因であり、先生は真にお仕事に殉ぜられたのだと思われてなりません。先生の視野はつねに国際的に大きく開かれており、中国の国際光学会への加盟とアジアの光学連合の設立を考えておられました。この意味で、先生はやはり業半ばであったと言わざるを得ません。

先生は優れた研究者であられた上に、いや、それだからこそまた、稀にみる学問と人生の「教師」でありました。そのことは先生の研究室を巣だたれた多数の方々が、先生のご指導の下に育ったことを誇りとして各方面で活躍しておられることから明らかであります。後進の指導にはとくに心をくだかれ、学士院賞授賞の際の賞金を応用物理学会に寄付をされて光学論文賞を設立され、若い優秀な光学研究者の励みとされました。先生のお教えは、しかし、光学研究者に対してだけではなく、先生は身をもって厳しく学者のあり方をお示し下さいましたが故に、先生に接することのできた研究者は、専門のいかにかわからず、真の学問をするものの態度を学ぶことができたのであります。

先生は真の厳しさをお備えになりながら、実に暖かい「人間」を接するものを感じさせずにはおかない方でありました。わずかのビールに頬をそめて、早口にしゃべられる先生のお姿、お声とわれわれは永久にお別れすることを強いられました。しかし先生の研究の成果と、われわれの上に遺された学問のおよび人格の影響と、立派な著書は、人類への遺産として引きつがれ、輝かしく発展してゆくことでありましょし、またそれを実現することは残されたわれわれの責務であると覚悟を新たにすること次第であります。